

福岡県立筑紫中央高等学校

創立百周年を迎え、新たな筑紫中央高校を目指して

県立筑紫中央高等学校は1917年（大正6年）に筑紫実業女学校として開校し、今年度、創立百周年を迎えた歴史と伝統ある学校です。新たな筑紫中央高校を目指して、「筑紫中央21世紀プラン」「ようこそ大先輩」「太宰府研修」等の特色ある取組を行うことで、学校の更なる魅力化を図り、グローバル社会で活躍する人材育成に取り組んでいます。

1 授業改善の目指す方向性

学校教育目標

- 校訓を拠に、志をもって広く学び、たくましく生き抜く力と豊かな人間性を培い、公共のために尽くす生徒を育成する。
- 百周年の伝統に誇りを持ち、生徒が自らを高め、人のために生き、愛される存在となる。

次期学習指導要領や高大接続システム改革等の動向を捉え、教員一人一人が授業改善について目標を持つことで教師力の向上を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、全ての教科においてICT活用やアクティブ・ラーニング型授業を実践しています。

2 授業改善のための環境整備

(1) 全教室に電子黒板機能付きプロジェクタ、書画カメラの設置<創立百周年記念事業>

教室にはノートパソコン、電子黒板機能付きプロジェクタ、吊り下げ式のスクリーン、書画カメラ等、全教室で使いたいときにいつでも使えるICT環境が整っています(写真①)。これらの環境は、創立百周年記念事業として、平成28年度に整備しました。

(2) 全70枚のミニホワイトボードの購入

ミニホワイトボードを、平成29年度のはじめに10枚、年度途中に60枚購入し、計70枚(各学年20枚+予備)を多くの授業で活用しています。

ICT機器の設置とミニホワイトボードの購入によって、デジタルとアナログを融合した授業改善を推進するための条件が揃い、職員研修を通して授業改善の方向性について共通理解ができています。



写真① ICT環境が整った教室

3 授業改善に関する校内での研修内容と方法

(1) ICT機器研修(4月)

教育推進部情報課の教員が講師となり、電子黒板、書画カメラ等を実際に触ってみることから始めました。4月当初、機器の操作で戸惑う教員も多かったのですが、全教員が活用するきっかけとなりました。

(2) アクティブ・ラーニング型授業の研修(5月)

ミニホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニング型授業の研修を行いました。実際にミニホワイトボードを使っただけの研修を行ったことで、その利便性を実感し共有することができました。ミニホワイトボードは、授業でいつでも使えるように環境を整えています。

4 アクティブ・ラーニング型授業の具体的な取組

生徒たちの「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した、授業改善の実践例の一部を紹介します。

(1) 1年生 数学

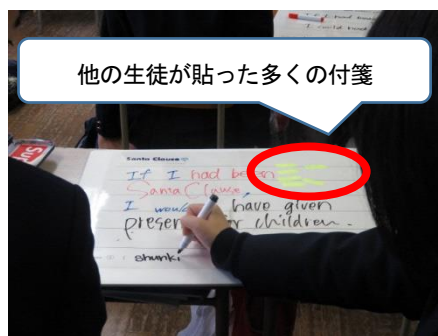
前時の復習の小テスト後、教師は書画カメラで解答を提示し、ポイントを絞って解説した。本日の課題は、ミニホワイトボードに挟んで、4～5名の班に一枚ずつ配布した。生徒たちがなかなか解決の糸口を見つけられずにいると、教師は直接的なヒントではなく、考える方向性を絶妙なタイミングで示唆した。一人では解決が難しい課題に取り組ませることで、生徒は皆、班に一枚のミニホワイトボードに身を乗り出し、自分の考えを出し合った（写真②）。課題が解決した班は、ミニホワイトボードを書画カメラで写し、スクリーンに投影しながら課題解決の手順を全体に説明した。他の班は、自班の手順と比較し、確認することで解決の糸口を見つけ、課題解決へと進んだ。最後にクラス全体で課題解決の手順を共有した。



写真② 班協議の様子

(2) 2年生 英語

間違いを恐れずに安心して英語で話したり書いたりできるような雰囲気の中で活動が行われており、さらに、基本的な表現を確実に習得させる工夫が見られた。授業冒頭には活動の指示がスクリーンに投影され、生徒はペアを変えながら、基本表現の練習をテンポ良く繰り返した。また、仮定法を用いた英作文の学習では、ペアで協力して作成した英文をミニホワイトボードに書き、ギャラリーウォーク方式（生徒が教室内を歩き回りながら他の生徒が書いたものを見て、良いと思ったものに付箋でコメントをつける）で相互評価を行った。教師は授業の最後に、相互評価で高評価だったペアの作文を全体に紹介した。



写真③ 相互評価の様子

5 ICT機器を活用した「アクティブ・ラーニング」導入の成果

全教室に電子黒板、書画カメラ、パソコン、ネットワークシステムが整備されていることで、ICT機器の活用が全教員に浸透してきました。ICT機器を活用した研究授業の参観を通して、互いの授業実践の中で「良さそうだったから自分も使ってみよう」という教員間の相互作用が増えています。たとえば数学で動く曲線を提示したときなど、見せることで生徒たちの「あー、分かった!」「そういうことか」という表情を捉えることが多くなり、視覚的な支援の良さを感じているという声も、よく聞かれるようになりました。

また、ICT機器を導入した当初は「書画カメラが分かりやすい」という生徒の声が多かったのですが、今では「ICT機器があるから分かりやすい」という感想を聞かなくなるほど、授業でICT機器を活用することが、生徒たちにとっても当たり前の状況になっています。

6 今後の方向性

教科の特性に応じた効果的な活用ができるように教科別の研修を重ねるなどして、ICT機器を十分に活用したアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を、今年度以上に推進する予定です。また、デジタルとアナログを融合した授業改善を図っていくことで、生徒の思考力、発信力を高めていきます。さらには、アクティブ・ラーニングで育成する資質・能力の評価方法について、研究を重ねていきます。